

良渚文化石器の研究

中村慎一

平成12年度から14年度まで文部科学省の科学研究費補助金を得て日中共同調査を実施した。研究課題は「良渚文化における石器の生産と流通に関する研究」である。

良渚文化の石器は20ほどの器種に分類可能である。そしてそのほとんどすべてが磨製石器である。この磨製石器の多様さは、その製作の精緻さと相俟って良渚文化石器の最大の特徴となっている。磨製石器を利器として用いる文化という意味で新石器文化の語を用いるならば、良渚文化は世界の新石器文化の最高峰といっても過言ではない。良渚文化といえばその精美な玉器があまりにも有名で、石器の方はやや影が薄い感があるが、そこから得られる情報は決して少なくない。

3カ年、延べ5回に及ぶ現地調査では2000点近い石器の実測・撮影を行った。実測に活躍してくれたのは大学院生クラスの若い諸君である。また、京都で岩石・鉱物鑑定の仕事をしている岩田修一さんに石材を見ていただき、本研究室の出身で現在は愛知県教育委員会にお勤めの原田幹さんには金属顕微鏡を用いての使用痕分析をお願いした。

一連の調査の結果、数多くの成果を挙げることができた。石器器種と石材との間はかなり明瞭な対応関係が存在することを明らかにしえたことはその一つである。たとえば、鎌はホルンフェルス、片刃石斧は流紋岩、鏃は凝灰岩、石犁は粘板岩といった具合である。それぞれの石材産地はかなり限定されていたと考えられるので、器種ごとの専業生産が行われていた蓋然性が高いとみてよい。その候補地についてもおおよその見当をつけることができた。今後、中国の研究者が石器製作址を発見してくれるのが楽しみである。

これまで中耕・除草用具と想定されていた「耘田器」が実は收穫具であることを明らかにしえた点も特筆すべき成果といえる。原田さんに中国まで重い顕微鏡を担いでいってもらった甲斐があったというものである。

このほかにも、石鉞（有孔石斧）の分類と階層性表現、破土器と石犁の使用法復元、玉器製作用工具の側からみた玉器製作技術復元等々、従来の議論を大きく進展させることができたと自負している。

今年度からの3カ年は「長江下流域新石器文化の植物考古学的研究」と題して新たなプロジェクトを実施する。植物学や農学の専門家も交えての学際的研究を展開するつもりである。卒業生、在学生の皆さんにも是非またご協力願いたい。